
女神からの伝言

有栖川いのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神からの伝言

【Nコード】

N8988S

【作者名】

有栖川いのり

【あらすじ】

井上恵の飼い猫、『白雪』が人間（しかも絶世の美少女）になり、恵（こっちは普通の少年）と一緒に過ごす物語。

うちの猫、人間になっちゃったみたいですよ。(前書き)

白い髪的美少女というのは100%作者の趣味ですよ。

うちの猫、人間になっちゃったみたいです。

これは夢なのだろうか。

「……こんにちは。あの、はじめまして。井上、いのうえ 恵君めぐみですか？」
ありのまま起こったことを話そうと思う。

今、学校から部屋に帰ると、部屋には綺麗な白くて長い髪を持った俺好みの超絶美少女がいた。

頭に着けたレース付きの赤いリボンが白い髪にとてもよく映えている。

ちなみに格好まで俺好みで白いワイシャツに（至極残念だが下着は透けていない）赤チエックのプリーツスカートだ。どこかの制服のような格好でもある。

そして、そんな俺得美少女が初対面のはずの俺の名前を何故か知っていて、しかも尋ねている。

言っただいだろうか言ってもいいよな言わせてくれお願いだ。

……………これ、何てエロゲ？

「えと、違うんです！ 私、その、変な人とかじゃなくて……うん、私、多分変な人ですよね……。あのー、私のことわかりませんか……？」

少女があたふたと手を振り、困ったように苦笑して俺に問いかける。

その仕草や表情、一つ一つが直視できない程に可憐で可愛らしい。「え……つと、ごめん。俺は井上恵だけど、君とどこかで会ったことあったかな？」

曖昧な物言いで訊ねてみるが、会ったことはない……と思う。

こんな絶世の美少女、覚えていない訳がないのだから。

「あ、ちょっと傷つきました。ごしゅ……じゃなくて、あなたにはよく懐いてたんですけど」

「……懐く？」

少しむくれた顔で言う少女の、『懐く』という言葉が少し引つかかる。

それに、今何かを言いかけたような……？

何かを思い出すような感じがする。覚えはないが、会ったことはあるような気がしないでもない。

「んー、そうですね！ その調子です！ じゃあヒント行きますね。

ヒントその1、私はあなたに撫でられるのが大好きです」

「撫でられる……？」

何かが喉まで出かけるのだが、その先が出てこない。

撫でられる、懐く、白い……。

「ヒント、その2。鈴のついたグレーのふさふさ、大好きです」

「鈴のついたグレー……って、え！？ まさか……」

信じられないという目で少女を見る俺に、顔を輝かせて少女は満開の笑みを浮かべた。

「わかってくれましたか！？ 私です、白雪おしろいですよ！」

手をばたばたさせながら自己を主張する少女、『白雪』。

「嘘だろ……」

「ううん、嘘じゃありませんよ？ ……ご主人様」

何故信じられないのか。

それは、はにかんでいる彼女が言う『白雪』とは、俺の飼猫だからだ。

撫でられるのが好きで、鈴のついたグレーのふさふさのオモチャ

が大好きで、白くて綺麗な毛並みを持った猫。名前は、『白雪』。

「夢だ、絶対に夢だ」

言い切って頭を振るが、一向に夢が醒める気配はない。

「……私はっ！ ご主人様にどうしても人間の姿で会いたかったんです！ だから会いにきました。会えました。だから、これが夢だって何だっていいんです！」

綺麗な凜とした声で白雪は強く言い切る。

だが、その表情は途端に悲しげな表情に変わる。

「ご主人様は……それじゃ、ダメですか。私に会いたくはなかったですか？ これが夢なら早く醒めれば

いいって、思いますか……？」

涙が少し溜まる瞳を、白雪が俺に向ける。

「なんか、女の子を泣かせてるといふ罪悪感がヤバイ。しかも超絶美少女。（ココ重要）

「あー……ごめん。俺も、お前が本当に白雪だっていうなら会えて嬉しい。ちよつと驚いたんだ、ごめんな。うん……なんつーか、そつだよな。夢だって構わない、よな。会えたのは本当だし」

途中から自分は何か物凄く恥ずかしいことを喋っているのではないかと自覚して、照れながらも何とか言い切る。

白雪をちらりと見ると、ぽーっと俺を見つめていた。

「……やっぱりご主人様大好きっ！」

「おおっ！？」

そして、俺に満面の笑みで抱きついた。

「ぐぶ……ちよ、おい……わあッ!？」

「きゃあああつ!?!」

二つの悲鳴が綺麗に重なる。

俺は情けないことに体力がない。科学部の幽霊部員なのに関係しているかもしれない。

「あ、……そうだった、私、人間になつたんだつた……」

失敗した、と笑うこいつが猫であることを認めざるを得ないかもしれない。

多分、いつもの調子で何のためらいもなく思いつきり体重をかけられ飛びつかれた。

ということは、猫であるあの時はともかく今の人間の姿だとうなるか。

「どけつ……どいてくれ頼む息が出来ねえつ……!!」

つまりはこういうことになる。

白雪は俺の上に乗っていて何だかとってもエロいような気がしないでもないのだが論点はそこじゃない。息が出来ないんだ。

「はあーい、今退けますね」

のんびりと返事をして、白雪が俺の上から退ける。

ああ、何かこんな感じだよなあ、白雪って……、と一人勝手に納得する。

そもそも、こんな美少女と関わりあえるならドッキリだって夢だつて何だつていい。白雪のいうとおりでもある。

「……白雪」

ため息をつく代わりに、白雪の名を呼んだ。

問題は山積みだ。

俺は天井を凝視するのをやめ、目を閉じた。

あーあ、何か始まる。

一つ目の問題

そして、ついに一つ目の問題が降りかかる。

「恵めぐみいー？ 帰ってきてるんでしょ？ ちょっと開けるよー」

ノックもせず朗らかな口調で姉の井上《みな》美南が俺に話しかける。

「だっ……おま、待てっ、今は！」

「入るよー？」

焦って目を開け姉に声をかけるが、姉は俺の話の話を聞いちゃいない。だから待てっって言ってるだろ！ という心の叫びを全く知らず、姉ちゃんは俺の部屋のドアを開けた。

「……………め、……………ぐみ？」

姉ちゃんはドアを開けた姿勢で固まり、目を見開いていた。俺に弟がいたとしよう。

弟の部屋のドアを開けて、弟は横たわっていて長くて白い髪的美少女がその隣で正座している。

そんな光景を見てしまったら、俺だって同じ反応をしたと思う。

「なっ……………きゃあああ！！！！ おかーさん！！ おかーさんきて！！ 恵が女の子連れ込んでる！ しかも超可愛い！ ってかあんな何やってんの！？ 何で寝てんの！？」

うるさくてしかたがないので俺は耳を塞いだ。

どうにでもなれ。悪いのは俺じゃねえ……。
そんな無責任なことを考えつつ横目でちらりと白雪ゆきを見ると、泣き出しそうなほど不安そうな顔をしていた。

「……白雪」

「じゃ……？」

騒いでいる姉ちゃんを放って、白雪に声をかける。

「大丈夫だよ」

白雪にとって、これは根拠のない励ましかもしれない。でも、今の俺が一番言いたいことだった。

「いざとなったら2人で家出しような？」

駆け落ちだな、と付け足して笑う。

「……はい。ご主人様となら、白雪はどこにだって行けます」

最上級の笑顔で、白雪が笑った。

胸がどうしようもなくきゅんとした。

やっぱり可愛い女の子には笑顔が似合う。

「なんですかあ？ 美南ちゃん、どうしたんですかあ？」

「きてよ母さん！ ほら、恵が女の子連れ込んでんのよ！ 写メっていいかな！？」

ほのぼのとした声とうるさい声がいっぺんに流れ出し、せつかく白雪といい感じだった時間が台無しになる。

もし俺に彼女が出来ても、この家には連れてこない方が良さそう
だ。

「美南ちゃん、ダメですよお？ 恵君も困ってますよお」

笑顔で姉ちゃんを窘めているのは俺の母親、井上美里^{みさと}である。

母さんに窘められ、姉ちゃんがつまらなさそうに携帯を閉じた。

「それで母さん、この子」

「あらあ？ 白雪じゃないですか」

母さんにはっこり微笑むと、正座してる白雪に近付いて優しく頭
を撫でた。

「人間になっちゃったんですかあ？ お母さん、もう一人娘ができ
ちゃったんですねえ」

「んにゃー……そうなのです。白雪は美里さんの娘になってしまっ
たですよお」

口調が若干移り気味になりながら、白雪も返事をする。

「……嘘、だろ？（でしょ？）」「」

俺と姉ちゃんの声が重なった。

姉ちゃんは単純に白雪が人間になった事実が信じられなくて、俺
は母さんが何の説明もなく一発でわかったということが信じられな
い。

「美南ちゃんが知らない女の子だなんて言うから、お赤飯炊かなく
ちゃいけないかなあーって思ったのに……白雪じゃないですかあ」

母さんは冗談やめてくださいよお、と笑いながらまだ白雪を撫でている。

「め、恵……。説明、しなさいよ」

「説明も何も……。白雪が人間になったらいいんだよ」

「あんた頭大丈夫？」

「……。俺だって信じられねーけど、いるもんはしょうがねえだろ……。いるもんはさあ……。」

俺はため息をつき、姉ちゃんは呆然としていて、母さんは白雪を撫でていて、白雪は幸せそうに目を細めている。

何すか？ この状況。

湯けむりと難題

「ねえ、恵」

俺を呼ぶ声に振り返ると、そこにいたのは姉ちゃんだった。何だか気難しそうな顔をしている。

……まあ、なんというか。やっぱりという気もするな。ある程度、予想出来ていたことではある。

「恵君。少しだけ、お話ししよう」

母さんが、食卓の席を俺に勧める。

今は白雪が風呂に入っているから、話し合おうとしたら今だということだろう。

「……ああ。わかった」

覚悟を決めて椅子に座る。

一番ありそうなのは、警察に通報するとか白雪に話をして出て行ってもらうとかだろう。

けれど、俺は白雪のことを守らなければいけないのだ。男として、さっきの約束は絶対に敗れない。

どうしたものか。策はない。

「恵君は白雪のこと、本当に白雪だって信じていますか？ もし信じているとしたら、それは何故ですか？」

「俺は信じてる」

母さんは、優しい顔で微笑を湛えながら俺に訊ねた。質問に即答

はしたものの、言葉が上手く出てこないことがもどかしい。

「理由は正直わかんね……。普通はこんな信じるっていう方が無理だと思う。……けど、仕草とか性格とか言動とか雰囲気とか、……かな。何か、あいつは白雪だろうなって。何かわかる」
「……私はとっても嬉しいです」

母さんは、いつものデフォルト装備の微笑みではなく、本当に嬉しそくに笑っていた。

「え？」

「私もそう思ってます。何となくわかるんですよ。白雪は、私達の家族ですから。」

ほら、うちってお父さんがたまにしか帰ってこないでしょう？ だから、白雪は私と夫婦みたいなものなんですよ。お父さんのこと、間違える訳ないじゃないですか」

何だか少しずれていることを優しい声音で言いながら母さんは手で髪を梳いた。

そして、何でもない事のように続ける。

「例えば、私は恵君や美南ちゃんが猫になってにゃーにゃー鳴いてたとしても、見つける自信があります。だから白雪が人間になってもわかったんです。私にとって、家族っていうのはそういうものなんです」

ああ、そうか。……そう、なんだよな。

何故かとても安心して、張っていた肩を少し落とした。

母さんの言っていることは、多分正しい。俺にとっての家族とい「あたしは絶対に反対」……姉、ちゃんが、おもむろに口を開いた。

「……あたし、嫌。……ね、猫アレルギーだし、私……」

泣きそうな顔でぽつりぽつりと言葉を発してから、きつと前を向き、拳を握り締める。

「絶対に嫌！ 有り得ないでしょ！？ 猫が人間になる！？ ならないでしょ！ だ、第一考えてもみ」「猫が人間にならないなんて誰が決めた！」

暴走しだした姉ちゃんを無理やり大声で止める。

大声を出した直後、喉が痛んだ。こんな量の声を出したのは久々な気がする、それも年単位で。

「お前がもし、いつか猫になったらどうすんだよ！ 人間が猫になる訳ねーって捨てられて悲しくねーのかよ！ 気付いて欲しかったとは思わねーのか！？ ……俺は、思うよ！ 無理な願いだってわかってても、気付いて欲しい。俺らに与えられた選択肢は白雪を見捨てるか、白雪だと言ってやってきたあいつに騙されるかだ。どっちかしかねーんだよ！」

「二人ともっ……！ 言いたいことはわかります、だけど、どうか声を荒げないで欲しいんです、……っ、白雪だとしてもそうでないにしても、お母さんは女の子の泣いてる顔、見たくないです……！」

それほど大きな声ではないのに、母さんの声は良く透った。

「ごめん……俺」

「わかってるって……、私も悪かった」

母さんが嗜めて俺が謝ると、姉ちゃんはどこか自虐的とも取れる

ような、無理やり作った笑みを浮かべながら走ってリビングを後にした。

「美南ちゃん……」

かききえそうな声で母さんが姉ちゃんを呼ぶ。
それから微笑みを失くして、視線を伏せた。

いまいち、状況が飲み込めない。
考えてみれば、なんだかうちの姉らしくもない。

最初の方なんて、無理やり理由をつくっていたようにしか聞こえなかった。白雪は人間となって今ここにいるんだから、猫アレルギーは関係ないはずだ。

最後の方だって、正直言って俺にはこじつけにしか聞こえなかった。

「ねえ、恵君……、美南ちゃんは、ちょっと不器用なだけなんです
よ」

それから、母さんは立ち上がるとやっぱり困ったような微笑を浮かべてそう囁いた。

ああ、まさしくそうだ。それが結論だろう。姉ちゃんはいつも言いたいことが言えずに、口より先に手や足が動くタイプなのだから。

「うちはお父さんが出張しながら頑張ってくれてるおかげで、正直言って白雪一人が増えたってうちの経済が回らないことはないです。いざとなったら育てる覚悟はあります。戸籍のことだってもちろん娘のためなんですから。何だっぺします」

母さんはそう誓って、そっと目を瞑った。

「……私は、白雪のこと天使みたいだっと思ってます。私はあの子を、愛していますから、だからもしあの子が人間として過ごすのなら、家族として迎えてあげたいです」

願いを語ると、またそつと目を開ける。

母さんのその瞳には、白雪と過ごす生活が映っているような気さえする。

「でも、私ではどうにでも出来ないことがあります。その時は恵君がきちんと力になってあげてくださいね」

「……俺に出来ることなら、なんだってするよ」

うんうん、と母さんが優しい顔で頷いた。

その顔は俺に希望を十分すぎるほど与えると同時に、俺の心の中に責任感を植えた。

「そろそろ白雪がお風呂から上がってくる頃ですね。恵君もお風呂の用意、してきてください」

「ああ。そつする」

立ち上がると、自分の部屋に入って着替えの準備をする。

タンスを足で開け、紺色で厚手の長Tシャツと伸びる素材のスボンを取り出し、また足で閉める。

今は12月なのでこんな感じでいいだろう。丁度、白雪の似合う寒い冬の季節だ。

これから呼ばれるまではすることがないので、寝転んでぼーっと天井を見上げてみる。

思い浮かんだのは、姉ちゃんの泣きそうな顔だった。

どうも、姉ちゃんの態度が引つかかったままだ。それは今考えてもどうしようもないのだが、気になってしまう。

姉ちゃんが素直になれるような手助けをしつつも放置するのが一番の方法だとわかつてはいるのだが、上手く行くのだろうか。

「考えてもしゃーねー、よな」

一人呟き、目を閉じた。

休もう、風呂から上がるまでは。何も考えずに、いよう。

十二月の冷たい風が、どこからか通り抜けた気がした。

仕度のちデート

「ご主人様あー……。私はこれから何をするんですか？」

白雪が、困ったような声で俺に声をかけた。

まあそれも無理はない。多分、俺の真後ろには姉の服を着て、母に髪を結われアイロンで巻かれ更には姉に薄化粧を施されている彼女がそこにいるのだろうから。

「デートだよ、デート。折角だし、見に行こうぜ。人間の外の世界。興味ないか？」

にやりと笑って後ろに声をかけると、白雪の元気の良い返事はすぐに返ってきた。

「興味ありますっ！」

「それならよし。なあ姉ちゃん、そろそろいいか？」

そう問いながら靴紐を結んだ。

デジタルの腕時計は午後1時を指しているからそろそろ出掛けようと思うのだが、こついう時、女が準備をする時間というのはとてもなく長いことを知っていた。

何しろ午前12時前からずっとこうだ。姉と母がいる俺にとってはこの待ち時間はもう慣れたものだったが、白雪を早く外に連れて

行ってやりたかったので少し急かす。

「うん、……うんっ！ 最高に可愛くできた。やっぱあたしって才能あるうー！」

ハイテンションで騒いでる馬鹿……もとい姉ちゃんが戯言をほざくが、最ッ高に可愛くできたのは白雪が可愛いからである。姉の才能ではな「げぶうッ！！」鈍器が後頭部に命中しました！

「殺すわよ」

「もう死にそうです……」

その鈍器は先程まで使っていたであろう熱々のヘアアイロンだった。こいつ弟に容赦ねえぞ。

「ま、いいわ。許したげる。ほらこっち見なさい」

上から目線つぜえ、などと心の中で悪態をつきながら振り返る。

だが、振り返って0.2秒で俺は怒りを忘れた。

「……あ。あの、ご主人様、その、私……。変、じゃないですか？」

その台詞は色々とくるから止める！ と一概に言いたくなくなった。

白銀の髪は艶を帯びたストレートで、アイロンをかけたのか昨日よりしつかりしたりボンの下から三つ網を垂らしている。

決して濃くはないが彼女の造形美を引き立てる薄化粧も素晴らしく、苦笑いを浮かべる唇は薄紅色に染まっていた。

服装もフリルのついた黒のブラウスにふわふわした黒のスカート。その色は、彼女の肌と髪の色をより一層対照的に映し出す。

いや、まあ、なんつーか……その、一言で言うならめっちゃくちゃ可愛いんだ。有り得ないくらい。ほんと。マジで。

「え、えー？ ご主人様聞いてます？ えっ、これ変なんですか？

ご主人様あああ！？」

「可愛い。めっちゃ可愛いですほんと。ごめんなさい」

とりあえず謝った。色んな意味で土下座したくなつたがやめておいた。

つーか、こいつの隣を歩くのが俺なんかで本当にいいんだろうか。

「そ、それじゃ行くか。うん。行ってきます」

「……行ってきます！」

俺の腕を引っつかんで、白雪は後ろに向かって思いっきりピースサイン。

何だかその仕草がとても可愛かったのだけれど、見てみぬふりをした。

……理由は俺の口元がにやけて頬が赤かったからで、そしてまた白雪の顔も俺と同じ表情だから、だ。

仕度のちデート（後書き）

テスト期間なのに投稿してみました。読んでくれた方ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8988s/>

女神からの伝言

2011年10月9日01時35分発行